

「あらまし事」の注釈

—— 顕昭歌学の陥穽 ——

紙 宏 行

一 「正義」がない

『拾遺抄注』『古今集注』以来『袖中抄』に至る、顕昭の果てしない注釈を読み進めていくと、明快な解答が出てきたというより、迷妄して迷妄のまま終わっているものも少なくない。彼の情熱と苦闘が非常にむなしなものに思えてくるのである。ここで、改めて、顕昭が注釈する営為と注釈内容とはどのような位相にあるのか、『袖中抄』を中心に考察しておきたい。

たとえば、有名な難義語である「カヒヤガシタ」(6)の次のような注釈はその典型例である。他説を「僻事」として否定している部分に傍線を付して示す。

顕昭云、(略)

…トイフコトハキコエズ。

敦隆ガ類聚古集ニハ、…オボツカナシ。…心ニカナハズ。

奥義抄灌頂卷云、…此義イカバトキコユ。…
又イケス襲ト云事アリ。…キコエズ。
又…ヨミガタシ。

又云、如何。

堀川院百首ニ、公実卿氷哥云、…サレド其証不見歟。

登蓮法師云、…大様ハ人ヲドシ事歟。

又登蓮法師ハ、…僻事也トマウシキ。トカクイヒテ
ヒトスデナラヌハ不実ノ事歟。

童蒙抄云、…僻事ナメレ。…此義心エズ。…

岸ノイヤヲ云トイフ義ハ、和語抄ニハベメリ。サレ
ドソレモコ、ロユカズ。

顕昭は、敦隆の説や『奥義抄』の説以下、多くの説を逐一引用しては「オボツカナシ」「イカバ」「其証不見」「不実」「心エズ」「コ、ロユカズ」などと、ことごとく「僻事」と決めつけて批判してゆく。顕昭の学識が躍動する得意の筆致であるといえよう。

顯昭の注釈の目的のひとつはそこにあるのであって、

ヨロヅノフミニ、キバスハキジノ異名トイヘリ。僻事也。此事ヲシラセム料ニ注付也。

〔キバス〕(36)

と「僻事」が「僻事」であることを知らせるために注を付し、あるいは、

二条院御時、或人湖上月トイフ題ニキナノミツウミトヨメリシヲ、其座ノ歌仙達ミナトガメラレズト承シ、口惜事也。仍注付侍也。

〔キナノミツウミ〕(269)

と、「僻事」に基づく詠歌に対して批判する「歌仙達」がいなかったことを「口惜事也」と憤慨し、先達の不備を補おうと「注付」したという。顯昭は、このような方針に従って、先行諸説に見られる「僻事」を逐一指摘、批判していったのである。

ところで、先の「カイヤガシタ」注釈の引用文に付した二重傍線部は、登蓮や『和歌童蒙抄』の説の引用文中に見える「僻事」であるが、これらの先行する諸説も他説の「僻事」を指摘しては自説を主張したものである。さらにそれが、顯昭によって「僻事」と決めつけられるという図式である。次々と生み出される「僻事」を否定して提示された説がまた「僻事」と否定され、またそれ

が否定され、という土竜叩きのような難義語注釈の果てしない循環構造が見て取れる。

それでは、「僻事」を虱潰しにしているってその先に何かあるのかというと、「僻事」の対になる、正しい説を意味する術語がないのである。もっとも顯昭の著作をはじめ歌学書は、貴顕の人物に呈上するもので、謙虚な著述態度をとるのであって、自説こそ正しいなどという強い主張はひかえるものであるうが、それにしても、正しい説という明快な概念が見当たらない。

近い概念としては、「正義」という語があげられようか。顯昭に、

両義おぼつかなければ正義さだめがたし。

〔『顯注密勘』四七二番歌顯昭注〕

という記述があり、この「正義」は「僻事」に対する正しい説をさす術語であるかのようにも見える。しかし、ここでは、「両義」のいずれが「正義」であるのか決したいという、むしろ「正義」の定めがたさ、不定性をいう語である。

唯一、『古今集序注』の「平城天子」とは誰を指すのかを注した箇所に、

今注云、付「此平城天子」、其義非^レ一、或聖武天皇、

或桓武天皇、或平城天皇、或以「聖武・孝謙」二代「共号平城」。此中以「平城天皇」可_レ為「正義」也。

という例が、正しい釈義を意味する用法といえようか。

これ以外は、『袖中抄』ほか『古今集注』など顕昭の著作にも、「正義」の用例はなく、『奥義抄』ほかの清輔の歌学書には少数ながら用例はある）、「僻事」が夥しく現れるのとは全く対照的である。「正義」を明らかにして提示するという注釈の本来の目的が、少なくとも表面には見えてこないのである。顕昭は、「僻事」が「僻事」であることを知らせるために注釈を執筆したというが、「正義」を伝えるのが注釈の目的であるとは明快に言っていない。「正義」を主張する注釈ではなく、「僻事」を徹底して否定する注釈、否定を媒介として成立する注釈といえる。

もっとも、清輔にも、俊成にも、顕昭にも、正しい説を追究していこうとする志向は認められはする⁽¹⁾。また、提示されている説が「僻事」か否かを判断するには、判断基準があるはずだし、それは正しいか否かの判断基準であろう。しかし、「僻事」が次々と出没する注釈の循環構造を見ると、流動的、相対的な基準でしかないように思われる。「僻事」ばかりが前景に出て、「正義」がきわめて見えにくいという状況である。

このような状況について、院政期の注釈言説の特質を

〈本文〉と〈今案〉というタームを軸に抉り出したのは小川豊生氏であるが、難義について次のように明確に断じている⁽²⁾。

難義となった言葉をふたたび詩的語彙として賦活するには、証拠（本説）を必要とする。だがそもそも「難義」となった言葉に、その使用を保証する根拠（本説）などあろうはずがない。

難義語に本説などあろうはずがないとすれば、顕昭らの注釈の営為はついには果てしない徒労に終わることとなる。顕昭自身も、難義語には本説とそれに基づく正義などあろうはずもないことを自覚していたのであろうか。注釈にひそむ大きな陥穽である。

二 「今案」について

ただちに「僻事」と批判されるような、次々提示される新説を院政期の注釈では「今案」と称している。「今案」について、小川豊生氏は、

確かなもとのテキストに基づく「本説」に対し、架空の説を恣意的に作り出していくことに対して「今案」の用語をあてていることになる。

という⁽³⁾。前に確認した、次々湧き出てくる「僻事」を

また逐一つづしてゆくありさまは、まさしく、小川氏が言う「今案」が恣意的に作り出されていく様相を表している。以下、小川論文に追隨して、顕昭の「今案」について若干補足してみたい。

顕昭の「今案」の用例に従って再検討してみると、二種の用法があることがわかる。

まず、根拠（本説）なき、思いっきの説を「今案」と呼んで否定する例である。「ゆふつけどり」について、『童蒙抄』『綺語抄』と教長の説を引いて、

私云、此三ヶ説ミナコ、ロエズ。無^ニ其証。四境祭ニ、ハトリニユフツクル事ヲ不^レ知也。就中鶏尾ノ長テ白ガ、木綿シテツケタルニ、タリト云義、以外ノ今案歟。遺^ニ恨之^一。

という。「此三ヶ説」には「其証」がない、「四境祭ニ、ハトリニユフツクル」とりわけ「鶏尾ノ長テ白ガ、木綿シテツケタルニ、タリ」という説は、「以ての外」の「今案」であり、「遺恨之」と嘆いてみせる。「今案」は確かに、小川氏のいうように、本説・本文なき妄説にすぎない。

しかし、顕昭の「今案」の用例として圧倒的に多いのは、自説を提示する時に用いるものである。

顕昭云、コレハ古今集卷十三恋部哥也。奥義抄ニ此

哥ヲバ書出ナガラ不^レ釈^レ之。心エガタキ哥歟。他書ニモ釈シタル事モミエズ。サレドヲシハカリニ今案云、世ヲウラミテ朝ニモツカヘズシテ、山ニモイリ船ニモノリテ避ヲバ逃名^{ノガルナラ}トカケリ。其人トイハレテツカフルニ、世ヲサリヌレバ、名モ世ヲノガル、心ナリ。除籍トテフダヲケヅラル、モ、其名ヲハナル、ナリ。サレバ除名トモイヘリ。又名ヲトブム、名ヲ、ル、名ヲ、シムナド申モ、名ヲムネトスル事也。然者此歌ハ、ワガナモミナトコギイデナムトイフハ、ワガ身モ名モ皆トコギイデ、世ヲサリウセナムトヨメルナリ。ミナトヲ皆ニソヘタル也。

（「ワガナモミナト」（10））
明確な証拠となる本文・本説が見出せないの、自身が見出した「逃名」などの漢語を根拠として自説を提示したものである。確実な根拠とはいえないことは顕昭も承知で、「ヨシハカリニ」提示した「今案」であるという。もちろん「今案」と称するのは謙辞なのであり、その裏側には顕昭なりの不遜な自信があるのだろうか、それでも「ヨシハカリ」の「今案」にすぎないというのである。また、同様に本説なき場合に、

今案ニ、此哥ニモヲグルマトイヒ、ヒモトカムトハイヒタレド、錦トイフ詞ハナシ。若キノヒモトカム

ヨヒトアルハ、ニシキノヒモトカムヲ文字ノ落敷。

慥ニ本説ヲ可_レ勘也。ヨヒトイフコトバモアリ。

(「ユグルマノニシキ」(155))

と、本説が後に見出されるのを期待しつつ遠慮がちに自説を「今案」として示した例があった。その自説には何らかの自信があるにしても、一方で、根拠なき説にすぎないことも自覚している。自身も否定的に用いているように、あらたな「本説」などの根拠が示されれば、今度は根拠のない思いつきの「今案」として葬り去られることになる。顕昭が示した説が後に俊成らによって「今案」として批判される実例は、小川氏が『六百番歌合』と『六百番陳状』の応酬においてあげている^①。

顕昭は、いづれ否定されるであろう可能性も予測した上で「今案」と称して自説を提示したのではないか。難義語釈義の不確定性、難義語注釈の可能性をよく自覚しているのである。

三 「実義」と「あらまし事」

ここで視点を変えて考えてみたい。次は、顕昭の歌学と実作に対する見識を披瀝した部分で、既に先学によって検討もなされているが^②、改めて注釈の問題としてと

りあげる。

顕昭陳申云、先右方の難に、「上・中五字、共に聞にくし」とある、人の心不同なれば、さも思はれん、とがめ申べからず。但、初の「春日には」と読るは古語也。万葉に、

うらゝにててれる春日に雲雀あがる心かなしも
独しおもへば

此歌などを思てよみ侍けるにや。又、後撰集に、

春日さす藤のうら葉のうらとけて君しおもはば

我も資まん

か様にもよみ置て侍れば、初句の「春日」、あながちにとがなくや。第三句は、前歌にも「ひばりあがる」と侍る。大方、雲雀をば「あがる」とよみ、水鶏をば「たゝく」とよみ、鴨をば「はねかく」とよみならはして、「鳴」などはうちまかせてよまぬ事なれば、第三の句とがなし。此難は極たる小事也。不及沙汰歟。されど、判者、実事をたゞし、力を入れて難ぜられて侍れば、所存を申侍なり。やまとうたのならひ、風情をさきとして実義をたゞさぬ事おほし。春は空にのみあがりてみゆれば、「雲雀の床はあれぬらん」とよめる、あらましごととはさのみこそ侍れ。さのみ実事をたゞさばこそ、みくださんれうに「空に아가

る」とのたまはせたる事も、さやは思侍らん。ひばりの心もしりがたし。叢にあらん子をみくださんれうならば、あまりに空につきてあがらでも侍れかし。

『六百番陳状』雲雀

自分が提出した歌「春日には空にのみこそあがるめれひばりの床はあれやしぬらん」が、「実事をただす」見地から俊成によって否定されたことに噛みついたものである。この歌は、家持歌の上句「うららにて（現訓・うらうらに）：雲雀あがる（現訓・あがり）：」（『万葉集』十九・四二九二）から、雲雀が空高く上がっていくようすをイメージし、すぐに視点を下に転じてその巣床が荒廃してしまうと表現した歌である。雲雀の巣を「床」と表現する歌は、曾禰好忠にある（『詞花集』冬・一四一）。すなわち、顕昭歌は、古歌の表現から発想してみたものであって、そもそも雲雀の現実の生態をふまえたものではない。そこで顕昭は、「やまとうたのならひ、風情をさきとして実義をたゞさぬ事おほし」と原則論を述べ、「実義をただす」こと自体が不当であると反論したのである。「実事」「実義」とは、ことがらの現実性、合理性をいうのであろう。最後に、「風情」をめぐらした結果として詠まれたそのような非現実的なことがらを、「あらまし事」と呼んでいる。

しかし、そもそも、注釈とは「実義をただす」ことではなかったか^⑥。冒頭に引いた、難義語「かひやがした」では、蚕を飼う小屋、ふしづけの飼屋、蚊遣火を焚く小屋、などの説が次々と提示されては「僻事」として否定されていたが、それらの説は、当否はともかく、各人が「実義をただ」そうとした結果提示された説ではないだろう。か。諸文献の記載事項によって論証し、また時に現地情報や土民説^⑦まで導入して到達した釈義は、すべて「実義をただ」して明らかになったことがらであったはずである。とすれば、「やまとうたのならひ、風情をさきとして実義をたゞさぬ事おほし」という和歌詠法の原則論は、逆に注釈を否定することになりかねないであろう。

同じような否定的発言は、「歌はかうまで世のことわりを尽して糺しうたがふべきにあらずとぞ覚侍」（『顕注密勘』四顕昭注）と繰り返している。顕昭は注釈作業を進める中で、注釈すること自体への疑念や疎外感を常に持ち続けていたのであろう。

顕昭は、さらに『陳状』の右の文に続けて、「あらまし事」を詠んだ歌の例を執拗に挙げて、自分の歌の詠法の妥当性を主張する。全文を引用するのは煩瑣になるので、「あらまし事」とそれに関連する語句を中心に摘記しておく。まず、『古今集』歌「鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ」に

ついで「鶯、誠に梅の花がさぬはねど、にせごとぬはするなり」という。続く二首の歌について、時鳥が「をのが妻を恋ひて」鳴くはずはなく「たゞ、人の心によてよめるや」といい、「蛩を使ひて秋の雁に風ふくと告ぐべき」はずはなく、それは「たゞあらましの事也」を詠んだものであるという。また、「機織」という虫が織り乱る声の綾を人に着せると詠んだ歌について「まことをたゞさば正体もなかるべし」と評し、禽獣にも、草木にも、さらに山にも「人のふるまひ、おもふ心をつけ」ている歌例をあげ、また「和歌には利口おほし」と述べて、発想や表現の大仰で極端な歌の例を並べてみせる。最後には、

然者、「和歌に法令難ずるは口惜事」と、法性寺入道殿はつねに被^レ仰之由、伝承侍しか。

と法性寺入道忠実の発言を引いて自説の正当化と權威付けを図るという流れである。

このような重畳する挙例は顕昭の得意とする所であり、意気揚々と反批判しているように見えるが、注釈家顕昭としては、自縄自縛となりかねない発言ではないだろう。か。「あらまし事」の事例が、極端な妄想ばかりではなく、各種の擬人法や「利口」という巧妙な詞づかいを含むものならば、和歌の表現方法一般にも拡張しうることとな

ろう。すべての歌ではないにしても、「あらまし事」を詠むというのは和歌表現一般をいうに近い。「あらまし事」を詠んだ和歌について、注釈によって「実事をただす」のはそもそも不可能であるということになる。

なお、「あらまし事」は『源氏物語』や『更級日記』の用例がよく知られていて、特に『更級日記』の例は、作者が浪漫的な若き日を悔恨をこめて振り返った時に用いたもので、『更級日記』を解く重要な鍵語となっている^⑧。ここでは、「あらまし事」は「風情」を極端にめぐらした結果詠まれたことからはあるが、「風情」が和歌表現の起点にあるのだから、「あらまし事」を詠むのは和歌の普遍的な特質であると言ったものごとくである。注釈を否定しかねない「あらまし事」としての和歌に注目してみたい。

四 「あらまし事」の注釈

「あらまし事」を和歌批評や注釈の中で用いた例は多くないが、『袖中抄』においては、次のような例が見出される。

イニシヘノノナカノシミヅヌルケレドモトノコ、ロ
ヨシルヒトゾクム

顯昭云、ノナカノシ水トハ播磨ノ稻見野ニアリ。
コノ哥ニハヌルケレド、ヨミタレド、件シ水ミタル
人ノ申シハ、メデタクツメタキシ水也ト云ヘリ。
但、考^ニ能因歌枕^一云、ノナカノシミツトハモトノ
メヲイフトイヘリ。今案^ニ云、ソノユヘナクモトノ
メヲノナカノシ水トイフベキニアラズ。アラマシ
事^ニ野中ノシ水ハヌルクトモ、トノシ水ヲ知タ
ラン人ノクマンヤウニ、ムカシ心ツクシイミジ
クオボエシ人ノヲトロヘタランヲモ、トノ有サ
マシリタレバナヲムスブヨシヲヨメリケルヲ本ト
シテ、モトノメヲ野中ノシ水トハイヒナラハシタ
ルニコソ。(中略)

奥義抄云、野中ノシ水ノ此シ水ノ事ヤウアリゲニ
中人モ侍レド、サセルミエタル事モナシ。此水ハ
ハリマノイナミノニアル也。昔ハ目出水有トコソキ
ケルガ、スエニハワロクナリテ人ナドモスサメヌ
ヲ、昔ヲ聞伝タルモノ、此ハ目出水有トコソキ
ケトテ尋テミルニ、アサマシクキタナゲニナリテ
有ケレドモ、此ハメデタカリケル水也、イカデカ
ノマデスギムトノメリケル事ヲヨメルトゾ申スメ
ル。ソレヨリ本ヲシレル事ニ云伝ヘタル也。今ハ
カタモハベラヌニヤ。此ハ人ノカタリシ事也。ミ

タル所モナケレバタノミガタシ。

私云、実ニタシカニミエタル事モナシ。此歌ニ付
テイヘルニコソ。野中ニモ彼シ水今ハカタモナシ
トカ、レタルイカゞ。猶目出キシ水ニテコソ侍ナ
レ。ハリマノイナミノ程トヲカラネバ人皆シレル
事也。サレバアラマシ事ニヨメルト思フベシ。基
俊ガ逢不^レ逢恋哥ニ、

イニシヘノシ水クミニトタヅヌレバノナカフル
ミチシヨリダニセズ

コレハタゞ又モエアハヌ心ニヨセタル也。シホリ
ナドスベキ事ニハアラヌニコソ。

〔ノナカノシミツ〔オボロノシ水、セガキノシ水〕(110)〕

『古今集』に詠まれた「野中の清水」は、既に播磨国
の有名な歌枕となっていて、西行や寂蓮など実地踏査し
た人も多い⁽⁹⁾。「件シ水ミタル人ノ申シハ、メデタクツメ
タキシ水也ト云ヘリ」という現地情報は豊富にもたらさ
れていたのである。歌句の「野中の清水ぬるけれど」は
現地情報に反して、現実を前提にする限り、この歌
は理解できない。

そこで、顯昭は、『能因歌枕』の「ノナカノシミツトハ
モトノメヲイフ」とする記述をもとに、もとの妻への思
いを仮想的な比喻を用いて表現したものと解する。播磨

にある現実の野中の清水に接しては成立しない、和歌世界にのみ成立する比喩表現である。そのような仮想的な比喩をここで「あらまし事」と呼んだものである。逆に「あらまし事」を詠んだ歌と解するしかこの歌を理解できないのであった。

顕昭が引く清輔『奥義抄』は、「人ノカタリシ事」に基づいて「野中の清水」の歌一首を解し、一方、野中の清水の現状については「今ハカタモハバラヌニヤ。此ハ人ノカタリシ事也。ミタル所モナケレバタノミガタシ」と述べていて、現地の実情についての明確な情報は持っていないようである。

顕昭は引用していないが、『和歌童蒙抄』には、古今第七に有。野中の清水、河内国にあり。又播磨の国にも有云々。水とは妙清水とぞ本文には書たる。



野中の清水

とあるのみである。論点の中心は野中の清水の所在地である（一〇）。「水とは妙清水」と書いてあるという「本文」とは何を指すのかわからないが、『和名抄』にある「妙水シミツ」という記述を言っているのであろうか。野中の清水の現状について触れていないのは、清輔同様に情報を持たなかったのであろう。

その意味で、野中の清水の「メデタクツメタキシ水」という現状と『古今集』歌の「ぬるけれど」の措辞との齟齬の解明に挑んだのは顕昭が初めてであった。西行や寂蓮らによって現地情報がもたらされてきたので、この問題を避けることはできなくなっていたのであろう。その結論が、この歌が「あらまし事」を詠んだものという解釈である。それは、ささやかな「野中の清水」歌の注釈史の中で、顕昭が到達した地点であった。

もうひとつ、例をあげる。

モロコシノヨシノ、ヤマニコモルトモヲクレムトヲ
モフワレナラナクニ

顕昭云、モロコシノヨシノ、山トハ、コノヨシノ、山ハ大和国ニコソアレ、モロコシニアルベカラズ。タバシ、シタフ心ザシノセメテフカキヨシライハムトテ、モロコシナランヨシノ山ニコモラムニダニヨクレズツキテユクベシ、マシテ我国ナラ

シヨシノ山ニコモランニハヤクレナムヤト、アラマシゴトヲヨメルナリ。コノ心ヲシラズシテモロコシニアルベキヤウヲ云、又コノヨシノ山ニモロコシト云所アルベキヤウヲ申スハクチヲシキコト也。

私考、承平二年二月十四日貞崇禪師述「金峯山神区」云、古老相伝云、昔漢土有「金峯山」。金剛藏王菩薩住之、而彼山飛「移泛海」而来。是間金峯山、則是彼山也。

カ、ルコトハアレド、ソレニヨリテモロコシノヨシノ、山ト云ベカラズ。サテハ哥ノ心モサセルコトナクナリヌベシ。但モロコシニ金峯山アリケリ。ソレヨリ飛来ル山ナレバ、カタゞ「モロコシノ吉野ノ山ト云ツベシ。サテソレニコモルトモ我ハヲクレジト云心モヤ侍ルベカラン。但吉野山ニコモルトモイハンニハ侍ラジ。作者ノ大臣ノ心中ハ知ガタケレド、ナヲサキノアラマシゴトノ義ハ、イマスコシ哥ノ玉シキヲカシクヤ侍ルベカラン。

又「考日藏伝」云、天竺仏生国、巽、俄闕飛来云々。カ、ル事ハサマゞ「ニ申タレドイヅレトモヲノミガタシ。是ハ天竺トアレバ、モロコシトハヨミガタクヤ。(中略)

タトヘバ此芳野ノ山ニ籠ランハコトモヨロシ。モロコシナラン吉野ノ山ナリトモヲクレジト読也。サレバコソ思モヨラヌ心アマリタルニヨリ誹諧ニハ入タレ、誹諧ニ入タランニテ心エンニヤスカルベシ。

〔「モロコシノヨシノ、山」(78)〕

この歌は、「シタフ心ザシノセメテフカキヨシ」を言うために、たとえ吉野の山が唐土にあったとしても、相手がそこに籠もるのなら「ヨクレズツキテユクベシ」と極端な仮定をしたのだと解説する。それは「あらまし事」といえるが、そこにこそ「哥ノ玉シキ」が「ヲカシ」と評価できるところがあるという。

「歌の魂」とは絶妙な比喩であるが、顕昭の他の注釈書では、同趣旨のところは「歌ノ意趣」(『古今集注』一〇四九)、「此歌之本意」(『顕注密勘』顕昭注)とあり、ここでは、歌の作意をいったものと単純化して理解しておく。

「もろこしの吉野の山」は現実にはありえないけれど、和歌の世界だからこそ「あらまし事」として成立する、むしろ和歌の世界のみ存する現実である。それを、「コノ心ヲシラズシテ」、もろこしに吉野の山があると解したり、逆に吉野に「もろこし」という地名があると付会するの

は、「クチヲシキコト」すなわち「僻事」となる。これらは、「もろこし」を仮想ではなく現実的に解そうとしたもので、いってみれば「実義」をただそうとしたのである。「実義」をただすことは、注釈の本来の目的であるかのように思われるが、かえてこの歌の誇張した発想がうまく理解されず、表現の真意（「歌の魂」）を見失い、結果的に「僻事」を生み出すこととなった。

「野中の清水」も「もろこしの吉野の山」も、難義語のひとつではあるが、語句そのものが意味不明というよりも、表現方法に問題がある歌句である。顕昭は、歌に込められた作意（「歌の魂」）に即し、歌の趣向・構想（「風情」）として仮構された非現実的空間（「あらまし事」）を明らかにして、語句の意義や用法の注釈を行った。その結果、ここでも顕昭は、「やまとうたのならひ、風情をさきとして実義をたゞさぬ事おほし」と注釈の限界と不可能性、無意味性に至ったのである。

「あらまし事」は否定的にも用いられる。

風吹バオキツシラナミタツタ山ヨハニヤキミガヒト
リコユラム

顕昭云、是ハ古今哥也。注云、アル人此哥ハ、ムカシヤマトノクニナリケル人ノムスメニスミワタリケリ。此女オヤモナク成テイヘモワロクナリユ

クホドニ、コノオトコ河内ノクニ、人ヲアヒシリ
テカヨヒツ、カレヤウニノミナリユキケリ。サ
レドモツラゲナルケシキモミエデ、河内ヘイクゴ
トニオトコノコ、ロノゴトクニシツ、イダシヤリ
ケレバ、アヤシト思テ、ナキマニコトコ、ロモヤ
アルトウタガヒテ、月ノオモシロカリケルヨ、カ
ウチヘイクサマニテ前裁ノ中ニカクレテミハベリ
ケルハ、ヨフクルマ、ニ、コトヲカキナラシツ、
コノ哥ヲヨミテネケレバ、コレヲキ、テイトア
ハレト思テ、ソレヨリ又ホカヘモマカラズナリニ
ケリトナムツタヘタル。

今案ニ、オキツシラナミトハタツタヤマトイハン
トテイヒヲクナリ。シラナミトハヌスビトワイヘ
バ、オソロシキモノタツタ山ヲヒトリコユラント
ヨメルヨシ、ヨロヅノフミニノセタリ。イトモミ
ナソノヨシヲ申スハアラマシゴト也。

（「オキツシラナミタツタヤマ」（7））

これは「オキツシラナミタツタヤマ」の「シラナミ」を「ヌスビト」と解する説に対して、「アラマシゴト」と言つて批判したものである。白浪を盗人の比喻とするのは漢籍に出典があるが、この「風吹けば沖つ白浪たつた山」歌の解釈に持ち込もうとする「ヨロヅノフミ」の説

には無理があるという。その説を和歌表現の真意を考慮しない荒唐無稽な解釈であるとして「アラマシゴト」と批判している。この場合、「あらまし事」はむしろ「僻事」に近い。「あらまし事」は和歌に表現されたことがらをいうはずであるが、解釈説を否定する用語ともなっている。

しかし、「ヨロヅノフミ」の著者たちは、和歌は「あらまし事」を詠むものという前提のもと、無理を承知のうえで、「白浪」を盗人の比喩とする解釈を作り上げたのではないだろうか。顕昭は、そのような極端な解釈を「あらまし事」と呼んで批判したのであるが、どのような歌でも「あらまし事」として解釈すると、場合によっては和歌表現の真意から離れ「僻事」の解釈を生成する結果をもたらしてしまう。「あらまし事」は否定的に反転し、正否両様の側面を持つ。

歌合判詞にも「あらまし事」の用例は少しばかり見られる。『六百番歌合』には、左右の難陳と俊成の判詞に計三例あり、『千五百番歌合』には顕昭の判詞に二例見られる。注釈ではなく、新作歌の批評に用いられているのは興味深いが、おおむね、風情や表現の非現実性を否定的に指摘したものである。右の用法の範囲を出るものではないので、これ以上はふれない⁽¹⁾。

本論もまたとりとめもなく漂流してきたが、ここで出

発点に戻って、顕昭注釈が到達したところを考えてみる。顕昭の考えるように、和歌が「あらまし事」を詠んだものとすれば、和歌に詠まれた語句の意義や表現方法は歌ごとに明らかにされることであって、そもそも普遍的な正しい説などありえないことになる。「実義」をただすことによって和歌表現の意味は明らかになるものではないし、逆に「実義」をただそうとするとかえって「僻事」を生じてしまう。

しかし、例えば、本来「実義」をただすことが注釈であるはずであり、「実義」を明らかにしない注釈などは注釈とはいえないのではないか。和歌注釈とはそのようにそもそも不可能性を内包するものである。『袖中抄』の、諸注を集成し「僻事」を是正するという、否定的媒介による注釈方法は、結局は不可能性に基づくものではないだろうか。「正義」に近づくように、ついには届かない。注釈家顕昭は、そういう注釈の迷妄と虚無の闇の中にいて、虚妄の「実義」と架空の「正義」を求めてさまよっていたのである。

五 「家説」になれない「私説」

そのような混沌として目的が見えない中で、注釈者た

ちは最終的に注釈することにとどのような意味を求めているのか。それは、清輔や定家の場合は「家説」の確立ということになる。

定家が師説（基俊説）から庭訓（俊成説）を受けて「家説」を形成、確立してゆく過程については、既に詳細に論じられている⁽¹⁾⁽²⁾。定家の注釈は、継承する子や弟子がいることを前提に、考証を深め書き継がれていく。定家にとって、そこに注釈することの大きな動機と意義と目的があったのである。

しかし、顕昭は、家の説の伝受の系譜から疎外され、また自説を継承する受け手もない。顕輔の説を祖述し継承者たることを誇示しようとする志向は見られたが、それは片々たる談話を記述するしかなかった。幸清らの弟子はいたようだが⁽³⁾、顕昭の学問を継承する立場でもないし、能力もなかった。献呈先の守覚法親王を頼みつつ、顕昭がたどり着いた所説はついに「顕昭云」「私云」の「私説」にとどまらざるをえなかったのである。

注

(1) 佐藤明浩「「かはやしる」の論争をめぐる」(『名城大学人文紀要』四六集、一九九三・一二)に、清輔、顕昭らは「ひとつの正説を得ることが、至

上の課題となった時代」にあったというが、おおむね妥当な見取りだと思われるし、実際には多くの難義語に「正説」が見出されていた。ただし、ここでは、実はその「正説」自体が相対的で、ついいには見えないものであることを問題にしている。

(2) 小川豊生「〈本文〉と〈今案〉——院政期歌学のディスクール——」(『古典研究』一号、一九九二・一二)に拠る。

(3) 注(2) 小川論文。

(4) 小川豊生「院政期歌学のパラダイム——釈義の方法をめぐる——」(鈴木淳・柏木由夫責任編集『和歌 解釈のパラダイム』笠間書院、一九九八・一一)に拠る。

(5) たとえば、安井重雄「表現・思想の基盤としての注釈——顕昭——」(山本一編『中世歌人の心——転換期の和歌観——』世界思想社、一九九二・九)がある。教唆されることも多かったが、顕昭の実作のための「表現の基盤」を読む取ろうとしていて、本稿とは論点を異にしている。

(6) 「実義」については、山田洋嗣「古寺の情景——「秘」が伝えられる時——」(『日本文学』一九九五・七)に「実義」が和歌史の中で「本」となり共有

される過程」について論じられていて、本稿においても示唆されるところが多かった。本稿は、「実義」と詠歌と注釈との互いに相剋する関係を論じてみたものである。

- (7) 「土民」の説が注釈に導入される機制については、注(4) 小川論文参照。

- (8) 論究されること枚挙にいとまがないが、「あらまし事」の語義に絞った論考としては、関根慶子「「あらましごと」考」(『紀要』(お茶の水女子大学附属高等学校研究会) 一四号、一九六八・三)、大坪併治「「あらましごと」原義考」(『訓点語と訓点資料』九〇輯、一九九三・一) などがある。

- (9) 歌枕「野中の清水」については、野中春水『歌枕神戸』「野中の清水」(和泉書院、一九八七・六) 参照。

- (10) 『口伝和歌釈抄』にも「野中のし水、かうちのくにあり。又はりまのいなみのにあり」とあり、やはり所在地は不明確であった。「野中の清水」を播磨所在とするのは、注釈を積み重ねる過程で確定していったのだろう。

- (11) 注釈に用いられた最初の例は教長の『古今集註』の「ヲモヒモヨラヌ、アラマシゴトヲヨメリ」(五

三一) というものである。非現実的な風情を指摘したものである。

- (12) 川平ひとし『中世和歌テキスト論——定家へのまなざし』「I・1『三代集之間事』読解」ほか諸論(笠間書院、二〇〇八・五)、深津睦夫「僻案抄について——注釈過程における定家の意識をめぐって——」(『皇学館論叢』二四巻四号、一九九一・八)、東野泰子「定家歌学と六条家説——『僻案抄』をめぐって——」(『文学史研究』三三三号、一九九二・一〇)、上野順子「『僻案抄』攷——御子左家「家説」の改変——」(『国文学研究』一二二集、一九九七・三) などに、詳細に論じられている。
- (13) 西村加代子『平安後期歌学の研究』「第三章・顕昭の古今伝授と和歌文書」(和泉書院、一九九七・九) 参照。

(本学教授)